朝夷巡島記第七編 一

へ13
704
31

遠18
門
704
31
巻

朝夷巡島記

（あさひなめぐりのき）

第七編全五冊

松亭金水著
葛飾爲齋畫

浪華

文金堂藏梓

明治三六年十月九日

朝夷巡島記全傳第七編叙

近曾稗史行于世。戲墨者流最多矣。就中曲亭子者。博覽强記超于衆。分明古今治亂。亦能積多年功。而所著幾于卷。未一誤於機。粤朝夷巡島記者。頗故人未發之妙案也。縱横經緯自在而更出人意表。惜哉

第六編未結其局而成黃泉之客使觀者
遺憾僕雖不及其巧遠知好戲墨之僻書肆
來請於嗣編固辭再三而猶不聽焉於是不
得已既及採筆脫稿反復叮嚀費日月且
雖勞其神只是若櫻與棘花開愛憎異也
偏慙他方之嘲所存者勸善而已矣冀四方之

看官憐微忠愛志操開卷幸甚矣

于時嘉永壬子春月於蓮池畔

茅屋閑牖

積翠陳人題并書

葛藤憑
大樹
生終迫
倒大
樹
澁谷小五郎
晴氏

蠟面迫餘
所世沃婆
蓑笠
乎
家流
人也恨
雞乎
可閑
安達景盛ガ愛妾
笹鶴後ふ
柳営ニ召れて側室となる

素夷狄行
夷狄
素患
難
行
患
難君
子無
入而
不自得焉

朝夷三郎義秀

夫木
みちのくの
磐城の
いはてのこ
おもふ
はるかに
ほしも
ふん

磐城
四郎
時直
妾
磐手

石韞玉而山輝
水懷珠而川媚

和田家臣
腰越獣六郎

旅店の主猛八實々
岡田冠者が一子
幼名剛若

朝夷巡島記全傳第七編總標目

卷一 續輯第一 募慾老婆奸陷君澁谷棘

卷一 續輯第二 勇士惜嬖妾別柳營戀情曲道

卷二 續輯第三 誠忠諫父與祖父密使渡口失路費

卷二 續輯第四 英雄大詈旅客說來歷得密書

卷三 續輯第五 狽狼難義漢非命死兇賊為陷忠良士

卷三 續輯第六 饗應酒飯畏蜂蠆美人一曲鑠鐵心

卷四 續輯第七 以召操英雄說道清庶民

卷四 續輯第八 再揮佞者拙謀且勝奸智舌頭

卷五 續輯第九 奸計弥詛醫盤城酷吏天誅直臻隱毒報

卷五 續輯第十 義漢道路遭災厄忠膽貫主僕再會

総計十條標目畢

○毎編姓氏畧目ろ今此編ニ新出の者其數多かゝざるを以て別ニ表出せゞ巻と用きて自ゝ知らん

○城戸水草の両人太田石戸へ使ゑていまゞ此編ニ復命せゞ朝夷既ふ危急ニ罹ふ看官遺憾ふ覚ふて能ゝ然まども彼両個隈ニ時日の後尚ふあゞ爰ふ尤けき一奇談あり故ニ后編ニ譲りて記さゞ

○判五一三田鶴媛等ハ非命ふ死して其後を説ざるを其遑ふけれゞこ八編ニ至りて朝夷三郎鞆繪の尼ふ再會の話且その賊を撃の件も詳ふ分解さべ

○執権の奸謀いよゝ長ト頼家を廢し實朝を立ふ義盛頻りふ彼を疎みて和田合戦の萠を含む第八第九の編ふ至りて益佳境ふ入ふ者なり

金水再識

朝夷巡島記全傳第七編巻之一

東都　松亭金水編輯

續輯第一

募欲老婆奸　陪君澁谷棘

唐山の常言に日月明らるゝ人とすれど浮雲忽地ことを覆ひ明君善政あゝんとまれど佞臣ことを妨ぐる夫叢蘭の馨ぐも秋風漫ふ吹損ず況ん源二位頼家卿幕府の嫡子ることを居ふぶる沁夷の職ふ任ト官禄を食て六足ふけるべ竟ふ驕奢ふ陪りて日中ハ終日夜ハ終夜美女を集めて飲宴なり或ハ蹴鞠ふ心を委ねて更ふ政ごと顧ざ二老智臣の諫を納むる呉曾遊興ふ耽りて久べ因幡前司中原廣元入道善信和田義盛畠山重忠等の股肱の臣ハ遠ざけらるゝ月ふ一度も謁まるゝを。中野五郎能成ハ下美ふある小人のことを膝下に待らし。遊宴乱行の補弼

とるをさいわひ尼は基政子れ方の縁ふかくて右大将家の此時より威勢衆人ふ冠たり。遠江守平時政今ハ執権の職ふあり。天下の政ゆ大小となく意の如くなるを見さまざまの驥尾ふ附て或ひハ此を利を射んと欲する者ハ媚を求めて主君のかく敬ひ掛き。奴僕のかく奔走ひまとふ心ある輩ハ権威を憎て自然その門下ふ入ることを中ふ肘を張世を憤る者さへ多し。奥ふ朝夷三郎義秀ハ伊豆の天城の山中ふて。かの鉄眉天藤五が幻術をのゑ上と掠め黄金の柱を光掘り。鑿ふ砕き鞭ふかけて責捌うんと計りけるを義秀隊ての案ふ差、そその容と化て城戸武詮水草昌之と牒ト合せ既ふその群を擒つ。天藤五をも諸俱ふ生捕ん思ひ。幻術をもて雲を發し。逃去らんとまるをとふ止めをとゆ射て隕せ炙所の痛痍ふ命絶し。甚者と掻ふ逸ふ擒めつとも曳えて頓て鎌倉へ皈来る。前司廣元ふ献て如此と具ふ訴へ言ふ。頼家卿ふ遂ふ旦義秀が功と愛て直ふ向注所へ出坐あれば北條父子を

始めとして廣元善信義盛以下ふ左右ふ列坐あり。當下義秀ハ真先ふ所遺しる黄金の柱を雑人ふ早持せその所屑をハ籠ふ納めるも雑人ふ負ひ次ふ擒の草賊三個を強く縛ち武詮と昌之ふ曳しるかくて向注所へ出けるハ羽林家頼ひとと高ハ。莞ふと笑て宜ふ吾不肖ハ幻術ふ獣堂さと黄金の柱を無えるふ逐ふ慚愧ふ絶ぜ為る残作謀策ふ取戻しるのみ陸奥の賊徒經任が股肱と宣へ天藤五と難なく退治せしるの其功抜羣なるのみ且その黨の草賊ども三個を擒とる。夫が白狀の趣きハ注進の書ふて詳ふ速ふ牢獄ふ下し。追て刑戮を加へ。尚ふ汝と爭ひも今更後悔少るるべと頻ふ称賛しゆひて子自一口の分を賜ふ義秀低頭平才ちて思ひもよらぬ厚きハ過ぎ又さへ分ふ過ぎふ恩賜の品剱冥加ふ餘て有難くとそいとハ言葉を做しけるハ廣元善信も義秀が智男のひとと云ひ賛て君臣怡悦の眉を開く況へ和田義盛ハ君恩頻

ヲ小胸ヲ元て老の眼くゝる涙を忍ひ見も今考く有難たしと倶ニ泣まるを。時
政父子ハ見て見て心裡ヲ歓びぞ義秀ハ此ハ来てより湯島沸太郎と掬めて吾
ヲ恥て今ハ壺の浦ヲ毒魚を捕へ勇ありと自ら誇つ今まで君の不ハ知ル賊を
撃且捕へて頗る敖慢の容ニ見えるヲ君ハ何ぞ其功を称しめべいうもて恐ハ若ハ
有と思へり渠ハ面魂あるくヲ尋常の者るべ竟ハ尖家とも顧くべき萌を
含むも知るべるぞ常言ヲ曰ハ二葉にして摘ぎる元ハ後竟ハ斧を用ろといへと
あり。と肚裡ヲ思案をる。ヲ羽林も入御あれば。ヲ遂ひ奥へ入る。義秀ハ命生
捕を矢藤五の首級ありとも。牢獄司ヲ渡ーす武詮昌之の両個を引ぞ急ぎ宿
所へ帰ヲけ。宮中の趣きハ頓ヲ改え高盛以下兄弟ハ出近へ縁て備
の酒殽を出し武詮昌之もこの坐ヲ仍らし。偖這回の功を称し。旦君ハ賜ハ賞
し。遠路の労を慰む。彼此その詞のさまくゝ義秀ハ額を指兄公よさの

る称しのひを畢竟這回の功ハ。君より命ぜられしヲあるぞ。一夜ハ物語を永り唐山
の奮記ヲあるのさへも思ひ出ことハ必定幻術を行るヲ賊の所為ぞと察しヲけ
ばこの家ハ望て安し所ぞ聊功ハ立ヲ仍られどよくく思へば人の知ざるヲ。
君の非を挙ヲ仍て快くも仍ぞと回答て要時歎息をその折父の義盛ハ宮
中より退出まつ上坐ヲ居て左右を祝かり這回三郎が手柄のわど。今ヲ始ぬるぞ。
歎賞ヲ堪ざるを因て君の心より。太刀を賜りる勇士の誉ありとハ人どもまこと二
層の禍を醸せんと吾ハ思ヲ北條父子ハ今日の動静心ヲ沿がこれる多し。各も
知るごとくかの一家の偏執る義秀屢功を立て條にうてハ権貴と人ども憚る元
挙動を心憎しと思ふあるべし。然とて彼家ハ媚諂ひ馬前の塵を拂へとハ人
あれど時勢を顧ミ己を曲て宜ヲ従ふもまこと君子の道あり国道あれば矢のやし国道
なれば矢のやしと孔子ハ説るべど王光禄ハ屈風のやし屈曲俗ヲ従ふと。世説ヲ有る公

思ひ合せ、刃の長きを以て國を治むるぶて然るべき的に自ら世間を憤ることあるまじき歟道へ
諂はんとある人我が凡俗にして聖賢の域に至らねば、この惑ひを開悟せしめ給へ
と説示せば三郎義秀は固より世に居あるべき人々この教諭を金道理と感じ奉り
羽林頼家卿いよいよ思ひ巡らしまふ。ふりまと大樹の任を被ふり四海の政を執る身
ふそ匹夫草賊の幻術に惑ひ多くの宝貨を掠らまおよそ恥辱を後の世まで
遺えとうとうと渠いくも計らひて吾過を補ひぬる業坐の賞に秘蔵の太刀一口は供
えかど思ふに吾は恥近きるの金荘園を充行ふに渠まざさせる沙汰は及ばず因
て先頃父義盛故右幕府のお時に馬の飼料として賀あり。相模の国三浦の郡
矢部の荘をもて義秀に譲るとぶ願文を出せ由は廣元等より言聞るるあり
ちと紛れそのまに図らう。汗は父ようて子に譲ぶ固より何の仔細あんされど
吾無ふる所ふあるを。這回の賞は一箇所の荘園を充行はんと勇士を愛るのいとう。

廣元善信と召ひ、ものよう命せ含めて陳ず。両個もくて此すとそはざるあいあざ
まど上云と悼て執権の慮をと陪して口外もせざりしく。今日の命を僥倖ふ
如此これ淀の熟遠別北条に達けるは時政の縁てより善も思はぬ義秀の羽林
手自一口の太刀と褒称ありしもふ快くまるふ今まで荘園を充行はんと思ひ
嫉まるくもふりの眉を顰め君の命に悖るにあるねどいまぶ若年ふ
く賞罰依怙のは沙汰も多く這回の一挙義秀ぶ功ありとはいひ取ふ足ざる
草賊と五人三人伐ることをの誉とするふ是ら九七荘園を充行ふと故幕府の
お時より功の浅深ふよて定めら賞罰ぶ国家の政行なぶ。君の恩
淀ふのも貴多等よくく思惟あるべ。在下も猶再思て愚存を述べとありけるべ両個
ハ案ふ相遠て例の遠乃が偏執をとそひふけるべ執権の刃を恐ふ迎ふ術を後の
評議と侯ふるとふ時政へ館へ帰ると室家牧の方及義時をく招さそわせく如何ふ

いを拒まん。汝達の異見を聞き欲と耳傾けて通て寄せ、牧の方へ送り敢て黒き歯莖と見りて若年といひ、羽林家のいと鈍さを笑ふ義秀小壺の淡ふて二隻の鱷魚を捕へ、ちまちの勇士と賛ぜ、人平生と咲のゝ渠が所為へ食ふたりと思ふ。さて這回のことは身の不明と顧みへ、かの迫て改むとは賢者の風ふて有難ち操を自いそぐ。義秀と賞しめ、その所謂更ふの。奈何とのふたとしては假令その子と殺し、君の非と撓ふ。然るに義秀その勇と黠とを自ら誇て、ますます自ふその賊と擊且擒として罪と訂さ。その所為忠ふ似さまとも、其実は君と、暗愚の謗と四方へ流さ、ことを恥とべき。邪結ふ暗さの恥と明ふ顕はす。その人として功あり、所領財宝の賞と充べ。実ふ忠孝の武士ふ。何とて功と賞せ、とは三歳の小児ども分解ふ易き程なり。加之かの賊ふ陸奥の賊将なる。俊羅五郎が股肱ふて幻術の書と持て、と。義秀奪ひ、とて、然るに其書と速ふ将軍家へ呈せ、きと。知ふ顔に秘ふ。いとの下心ふ量らるべ。渠勇力ふ人ふ。万夫不当と咲ふ。倘その秘書と熟讀。雲と霧雨と招び、隠形奇怪の術とるさば、天下の果ふ陸奥の径任ふ十倍ふん。君執権のふん分として大笑ふ心着ふ。捨ふ人寛ふ迫ふ計らひと云ひ、ふ。然るに妾ふ浅ふ女子の分ふて政ふ口出ふ恐けるとは云ふ。と向世ふ人ふ。ふ隨言と心隈ふ。言ふ。ふ用ふると用ひざるとは君が心ふ任せ、且義時と商議ふて行ふ。今ふ極ふ。在下が云と差ふ。一件和田の一族ふ奮功ふ募て我云と云て吾一家と蔑如ふ。然るふ義秀武勇ふ。今ふ君の寵ふ誇て其威と逞ふ。ふ人ふ。天下の乱と生ぜん。願ふ父ふ。渠ふ鬼と挫ぐふ如と咲て時政笑ふ。汝達両個ふ為の陳平子房と云べきふ。如此ふ。と云て次の日宮中へ出仕ふ。廣元善信等ふ。と偽へ且羽林家へ尼ふ。仰ふ。

父子夫婦閑堂に
あつて和田一家の
威儀肅とろこ

[illegible]に両側の[illegible]臣[illegible]住[illegible]ぬ北條が計らひ
小言上のほとりに[illegible]小詮方なく。快く[illegible]口を噤む。折つく言次の若侍國の彼方小手
[illegible]。卿召ふるて朝比奈刀称。卿[illegible]聞て時政腮て受[illegible]
[illegible]八喚出せと。いふ間程なく朝夷三郎。衣紋製い立ちつまび廣元善信心[illegible]
這八何事と見合ものこ。時政扇と笏小採り。唯今義秀と召ること。各へ[illegible]
ご告げ。老の麁忽と思へまんが。綽急にてそのうと。告る小暇なき故なり今
義秀小向とて。其縁故と知まへ。曾秋迄て此方と向き。やとれ義秀来小
這面天城の賊と撃。将軍家の御心と慰め奉るへ一段の。手柄も猶つべく羽[illegible]
小も満足小思ー召る所なり。然るに你その砌。賊百鉄盾矢藤五の所持とする
幻術の書と取揚ることを聞りされば速小将軍家。献ぶべき筈なると合に於て其
儀なく。且演説も及ぬ。必小彼の書と奪ひ来き。術と学ぶ為なんと君の御不審

深さふなり。在下と為て正さる。直さるその書と出ひふ於て。今まで秘する罪責とべ
る時政の言ー誘へ。宥めらる方もあるべー。如何小朝夷義秀と勝負を結て
向ふ妻下義秀些日発がいふも其書八宜ふべく矢藤五と対ー。況渠が懐中
秘ずと在下手自取揚て持帰せひひー。這いその始め経任の所持なると矢藤五が
奪ひて逐電ものこ。在下が地小在のと。聞ることのやとふ幻術の書のべと拠て
見るふ隠語りて。書記せものこべ。昨辛の間小解まべきのこ思小是と解ーこ
とり。国家の為小要ふ術ぞ。却て他小悪逆と称ひ。後と存ぜるこ。時且て過ぎ
二年と。焚て灰炉とる。畢ぬ勿論そのと賢慮と窺ひ。けらんれと存せるこ。固とを
知の書と分捕て。差上よこの命もあるに。旁かまく差出ざんこ。烏滸の事と存する。其
も焚捨てひのこ。と河曇らに述けるべ。時政再びのへ言ること。要時いこと嘆ーぶ。くこ
執権の威ふ似ると。忽地小呻吟る。其ふ虚言の似ず於て。ぜる然度ふ吹えねど焚

捨らるゝとも今まで更に詮なし。誰ありてかその虚実を知らんや。よし又実なりとも其ハ
證文を献らせよ。倘焚捨しと虚言て秘に蔵しおくとも。然バ其身ハ固より三族まで罪
科を被らんとの趣を書載せ。料紙硯をとり寄せて朝夷の前へ推居れバ。義秀俛首き
て仔細に及ばず。と執権の指揮のまゝに。証文を認め畢て時政へ渡せバ。時政これを読下し
て両個の老たちに向ひ。偉哉如此ならバ人ハ在下上ハ言しあげん。足下當心あらせらるゝ事也と席
を立て奥へ入り。こゝに於て朝夷も。おさ/\暇賜ハりて寓所へ皈りぬ。そを父義盛と兄常盛
が。ことに歎て説ぬ。汝ハ時政が書をもつて時に望ミ。密計の補ひなさんぞ巧なりと人々その
面持をもて察するに。焚捨しといふ紛しき望もなく。證文を認めてハ彼方々が実ハ
かの書を焚捨て。固より幻術の書なれバ。国家の巨害なるものなり。都てその妖魔を解の
術さへ書載れバ。倘敵有てかの術を施すものあらんときハ。これを拒ぐ一助あつて益ありとて
いひ因て深く秘ておけ。柳下恵ハ飴を見て老を養ふによしといひ。盗跖ハ是を見て錠を開くに用

ふべしと言しとなん。聖賢の書も用ふる所善ならざれバ悪となり。邪道の書も取て善用れバ國家
の益となるなれバ。是らは言ずもがなの理なれど。邪なる書を惜み怪しみ證文を献じ
在下が心を誘ひ給へかし。とその瑣細を言ふのごとくにて義盛うち点頭てもだし理なること
なれど彼人の奸佞なる。以後猶心を用ふべしとその不虞をぞ守りける。爰に尼御臺政子の
方ハ羽林家の思ふ心より荘園一所を義秀に賜らんとの御沙汰ありしを。這ハ決て思ひもよらず
偏に依怙の沙汰に計らひ思ひ止り給へと。密に告しかバ。然るに時政密に告しかバ尼御臺
点頭給ひつ。尚具に荘園を与へるのみならず。将軍家へ委細に言はべしとて
て羽林の御所へ参りて時政が言せし隙なく。それと止め参らせしかバ羽林も適ある言乃空
しくなりて心中にいとゞ憤りあんなれど母公の命せ給ふに辞むべきにあらざれバ程よく
回答まゐらせけるが。吾天下の主将として。一箇所の荘園さへ心のまゝにならずとて。打嘯き
茉ふりと世を無端思ひ。その程ハ日来より宵ながら鞠さへ催さるゝ事もなく。特くらく

過させぬことを偏に朝夷が莊園のことのみ〻〻廣幡の局と云へる容顔美麗なるに〻〻
〻て声よく謠ひ舞をまひ云の道にも暗からず始めて宮中に召されしこの方寵
愛あり〻て聖君賢理と称せられ〻し漢帝の李夫人唐帝の楊貴妃
が寵愛も〻周の〻ずの愁ふ情を運ひのひ〻ふこの頃聊の労よりも竟に重りて空閨のむな
しきこの世を去り〻ぬ。羽林家只管悲〻哀傷なりかなしみけれども會者定離の〻ひ
詮方なく殿と塊の土に封じぬかなしひ羽林家にて夜とも昼とも〻その傍を
慕ひて物狂はしきまでに細き寝食なりに安んじ〻ぬ斯て乳の結ばれて此病
の出のやまひと例の中野に下脂近の面に只管に云て慰むれど慰めかねて諸伴に晴
時なく折〻なるまで羽林いとど世間を要なきのみ思ひ乱とのみ北條一家推成に誇
ふ故なり。思ひ名者ときくあれどさなきて会速に如何にもまさるなく頃に日に副
積り勝なる一夜の霄に伽の甲乙うちに集會何なるにこを慰めんと在と無とうづま

ぬ中に渋谷小五郎時氏が扇を把て掌を敲き
〻當月初旬崔が宅の神事の折在下適暇をうかがひ。その行装を視るに編笠
に面を掩ひ僕一人を伴ひて彼処此処をさまよひ人交りの中に交りて是を見物なるに在
下と肩を並べ肘摺あひて見物なる女子の頬に清練の被を宜うるねども蘭麝の薫
を顔郁として能くぬ心地せらるに猶面影の未だ立絶む人を僥倖なるまま
後へ回りて是を見る地なるに侍女婢女と従者四五個在下が挙動をいと怪しく思
けん婦人に何やらん低語て是を早めり彼方なる在下のまさに執念くいでとのまゝ実に
後方に着てのち猶に恐来る涙に被へ内へと猶に恐れて思ひ定めて条件天使も
なんぞ花洛堀河白柏子の笛なりとの地下に来て此人に云へと倚る。
と不審をば無なりに微笑て此方に来て妾の地に来ーぬるに君に折く美なるを今
主ある身の上なれば訪来らせんもう將なるまじ。意外の速遠にうれさに君にも悲

なく住みなるこのいと愛で折ごとに覓めるみ昔語りの伝へんとの人捨て難く手る
勿論彼地に在りし酒宴の席へ打ち拒き真と副させるのこゝろぞ同郷ゆゑと
いへど思ひもよらぬ遺憾なれ遂に猶引とゞめ従者らも多くは彼こよる況
出世いと愛でいつゝの縁で旅人の妻にもなれひけと向ど拒めわとのこゝろ笑とて在一
ゝど屋岡へとそはぶやあり一人甘縄の刀称ぶ大番の方折ゝに旅館召抱られ妻と
寄わせが娶喰虫の好きと竟に刀称ふ方の大番果て藤倉へ戻りの人時
に至て妾と父と母とに不足なるやうを充て給ひ方と方の地へ移ま せ一人
今年如月の初めより彼とゞの地の陰らゝ今日若宮の祢事ことゝ雲時の脈と
えもうーとの行仕ぶと見に帰りぬと実に在下さるもく甘縄の刀称といへ妾達景盛
ねかゝん這い鎌倉の老ぶに二三と寄に盛長ねの指家に戻ぶ威勢ゝいふ女子
性なくて玉の輿ぶ方ことのいなく愛で家さ記果報と称賛さて世間に報然ゝとゝ漫

人ぶる言ひ七とゝ浮ぶ愧て立退ぶその面影の嬋娟さ白拍子ぞ一時さ広廣に花
洛ぶ西個とぶ方ぞ人ぶ在下も然ぞ今ぶ富下ゝ十倍の美麗
さ鵬閑ゝ在ぶ高家の北君とゝ慰ゝ妾達ぶ秘蔵て
高ぶ方ぶ女理ぶ方ぶ方の美女ぶ地へ来ぶ今ぶ方ぶ呼ゝ笑
へ方ぶ姫ゝ頼家ぶ熟ぶ在せ方ぶ忽地ぶ方と記ぶ晴氏実ぶ方ぶ
美女の家ぶ西個とぶ有ぶ方ぶ方ぶ容想像ぶ女と奈何ぶ方ぶ
のゝ方ぶ方ぶ作ぶ晴氏笑ぶ笑ぶ君の威勢とぶ方ぶ振ぶ方ぶ妾達景
盛ぶ愛妾ぶ召ぶ寄ぶ方ぶ北ぶ沙汰のゝ方ぶ君ぶ傍ぶ方ぶ試
ぶ消息ぶ方ぶ心ぶ引ぶ方ぶ在下ぶ媒ぶ人ぶ仮ぶ方ぶ頼
大ぶ歌ぶ方ぶ人ぶ恋ぶ方ぶ細ぶ書ぶ奥ぶ一首の歌ぶ副て小五郎晴氏に
ロ方ぶ方ぶ晴氏ぶ方ぶ月ぶ見ぶ副書ぶ堅く封ぶ表書ぶ花谷城

ちつと記し彼父母の許より送りてこゝまで来る所侍婢を従へて将て来ぬる心利たる下
僕あまたありその心をしらせ旅人の状に打扮せ安達の三郎盛が甘縄の宿所へとまうでけ
るに使もかの下僕は鬼角して安達が邸の奥に到りかの文を出せば執次の婢女にわたし
けるに直に笹務が子舎に持参らせけるにさるに笹務は堀河より表書を見て
把る手も遅しと封おしきりて裡を見るに昔のとほり渋谷小五郎晴氏が副書して悉くも
羽林家の心を籠させ給ひつる文にありけんと読より胸うち騒ぎてその文体をよくも見ん
ばりつぐせまし と思へば大き息のみ吻まれ然れど封さへ切たるそのまゝに止べきならねば
と四辺に心つくしく始めより終まで讀下しに筆の跡さへ凡ならず見れば眼に浮ぶ涙をおさへて
あ空のと詠めやり心地死ぬべく踏迷ふ恋の山路の草の葉に露やおくらん袖袂絞る斗
なる憂思ひ心あれ身も然ばかりにおもひまさらせ給はゞと書連ねたる是が実情のことなる
ば勿躰なきまで嬉しさの身には余れど今の身は已に主ある身なり鹿丈の身なるを如何

せんと思へばいとゞ浅増さに筆採る手さへ悩まし運びも自在ならざりしがかくて止べき事
にもあらねば稍ありて返し書なせる其折の消息恐ろしけれど如此々々
ならましかば何と回答を羊躑躅はとて推しかはしと書をとめて晴氏の名宛にて封じ
箱裡女をもて使へつかはしたるに下僕は馳帰りて主人にかくと告ければ晴氏はわざと
きゝ熟と視て点頭々頻て羽林の御前へ出その文を携へて彩のやくの返しと献るに
大の文体を推量るに心は君に従ふまじきも景盛もまた否とは果敢なくてはかば回答も
ある兼あらの底意ありける然るに牧田が消息おらんへ悼まふおくれ偏に宜しく計策
と廻らせけるに此ひ是を出せば頼家すなはち彼書をとりあげて視るに不走り書の
艶藤さん春の花の風に飛び妹の卅あまりの香をぞそくいとあやに書倣しゝその文辞
さへ拙からねば是を視頼家はかいよ其人の床しくて胸さへ踊る心地せられば何を
して景盛を遠ざけんとぞ討らひける丈常言ふに似たりあり風来らざれば樹もうご

終ん舟押さバ水濁らん。晴氏君の意に悖ひんと道ならぬことハ勧め奉らん。不善を諫むることそなくバ悪を醸して国家を乱す。是をも忍ぶべくハ。孰れか忍ぶべからざらん

續輯第二　勇士惜璧妾別
　　　　　柳営恋情曲道

再説羽林頼家公ハ。如何にもして一日も早く。かの美女を我ものにせんものと心を焦されども。いまだ然るべき便りを得ず。徐にするとも堪兼たまひて。中野五郎に密やかにその計策を謀らひ給ふ。素より好佞にして生怜悧なるものなれバ。君の傍に膝を進め。倖今朝にあり。頼て老臣なるものと君へ訟へまをすべき。当下箇様の御厳命あれバ安達景盛に逢ふてよんで更に仔細いはず。如此にて渠が居たてあらバ。猶在下が方へ絹その美女は件の籠中の鳥を抓むよりいと易しと。辞も為げに言すれば頼家莞爾と笑みつゝ今に始めぬ汝が即智。いとゞ感ずる所なりと頻りに称讃しのハ。汝侍に居たる扇谷晴氏に膝を進めて言まをす。ここに究めて良計なり。然れども我に一箇心に掛ることのハ弁ず彼朝夷義秀なり。渠近習の列にありて在下等が同僚なるをも知たる如く年に似ける強者にあるなれバ左様の企あることを倫吹も聞かバ賢者ぶりて君に諫め奉るべく。さる吾們を誡むべし。されバ中々に面倒ならん。景盛の他に義秀をも退けもしその辞就しとのいを以て中野能成といふも心の着れたり。渠聊も知る時ハ。この計策行ハれまじ。如何して退けんやと良案を思案して一人…くこうち点頭たるのハなり。君も知しめすごとく。先頃陸奥岩城の郡に山論のことありて百姓們党を結び既に乱逆に及ばんとせし地頭等漸く制止めかねつ騒動ハ猶やまずといまだ裁断のことあらぬ由。然るべき使を遣らまくそ。検断裁許なさしむる然ハ老だもあまたござんめれ。その命を被るべき人を撰むとの義秀ハ勇略のこゝろ智弄推歩の術

朝夷七編巻一

朝夷七編巻一
佞臣等謀て安達が妻を奪ふ

又も習ひ浮べてあるとの人其検断と渠が命ず遠く陸奥へ追送なのち内外の法ぶ
べくこの儀いかと言ふまでも羽林熟聞に渠と退くるあい宜くもあれそへ近習なり
任ぶ法ぶ賦税のこと分掌の者なるべ悦ひくく曲ありこと執権へ決さるとも光義
べ他のまとをのくるよと命ぶ能成膝伏進め如何ぶり渠ど住ゆいあるねど君ろの
命ぶ執権も手拒まんまづ兎ぶ角ぶ成ぶ命せ出さまと言ふ言ふ
頼家いその言葉ぶ逆ひるのぶ到て中野能成い前と退出て執権の結所をくり
ぶ使の男と浮び吾内へ執権へ言ふ糸らすのあり若ふ法ぶこの所へ入ある
せとべかの男ぶ浮ぶ如此くやう言ふ君のお掟と取次へ常ろのまと時
改へ應と回答ぶ彼処へ出べ能成へ未坐へ下りて礼とぶ唯今君の命ぶ先頃岩城の山
論のこと然るべき人と擇ぶ検断なさめんと言ふ其後絶て何の沙汰ぶ必ぶ義秀へ
青春のまと方ぶ達ぶて才智あり殊ぶ渠いかの国ぶ久く住て人気と知り然へ

まべ這回の検断へ渠ぶ倍とるべくこの議執権まし決ド異議なく思ひ
義秀ぶ命ぜ頃ぶ出せんとの法ぶ在下是と兼ねるあい賦税ぶ拘ず
徒の任ぶると義秀ぶ命ぜるまんいぶ何あるんと存ぜまど君ぶい殊ぶ義秀と
愛ぶ意ぶるこの除り猶ぶの功とぶ任せて荘園の一所ぶ二所ぶ死行ぶいれんぶ心
と推ぶ法けまべ渠ぶ法ぶ拝めの奉ぶ執権ぶ言ふ述て賢ぶ任せもあくと必て
時政遠ぶい回答ぶるべ眉と頻めて要ぶ考へあるべ忍地ぶ掌と假ぶうちかの
山論の起立とのべ尋常のぶ法ぶ陸奥の賊将経任ぶ押領ぶ在ると彼ぶ
後ぶの地所とまべ先主へ返さるぶ元来遠境のぶの人其人気ぶ穏ぶ弱
ぶ採ぶるわとぶ強動ぶなしぶ。然まべ検断の使ぶるの智量実ぶあ
ぶ地利美術と精ぶる者ぶでぶ悦ひがて然ぶ賦税と堂て其ぶ長
るべ生憎ぶ実ぶるべ。ぶこの事ぶあるべ義勇ぶ精ぶべ故ぶ申ぶと擇

して延引に及ぶの処ろ。濟に君へまさ君なり義秀との思しかしは心着ざる所なる老臣等と商議なり。其頭に討らるべしと。然て能成は猝なりぬと心裡に欲び。別を告て奥へ入るが程もあらせば。時政始め廣元善信等一六谷に君の拜謁を乞ひ。今ぞ羽林家則出御あるに。各席とさだまりて。三河の国の早馬来り注進の趣きは。去ぬる月より當国に所々に群盗起りて良民を害ひ。守護へ地頭等人数を集めて平げんと致せしかど。賊は次第に勢加はり。乱妨狼藉言語に絶えたり。何卒然るべき軍将を下され。早く平治なさしめ給はゞ無越度なるべしと訴へて候なり。誰を討手の将として發向はせ給ふべきと言しけるに。頼家は聞て中野能成が言しけるは。爰なりと左右の袖を搖合せさせ。人数の多くも有野伏強盗の所為なれば。何条させる事の有べきなれど。早く討手を向るになし。其討手将たるもの安達景盛の外にあるべからず。如何となれば三河は渠が荘園なれば。頃く渠に命ぜらるべしとの命に因て。老臣等は六理あるに従ひ。即安達景盛その

事を傳えて。唯今出仕あるべしとの御使を下さる。當下時政君に對ひ。陸奥岩城の山論のことは。まだ然るべき人を得ずして檢斷遅引に及びしが。君は義秀をもて其任に宛給へんとの御諚のより。中野能成より兼て則老臣等と評議ありて。既に義秀と究めては頼りくは序に義秀を召せしまし。速に命じ給ふなり有難くいはんとは。頼家点頭給ひ。汝等善しと云ふぞ。さらば分撿けんと仔細あらし。頓て喚べて宣へば。玄来って義秀が件ひ来る。斯て頼家右のよしと自ら命じ給ふ。朝夷義秀は兼ての命を辞むにはあらねど。在下不才の身を以て。かの山論の撿斷。此彼を決し言えんもおぼつかなく。這は思慮深く算勘に闌たる人の任なり。武藝の争克すべき事にあらずといへば。敢て北條時政[illegible]くやせれ義秀。汝遠路の労を厭ひ。卑下して免されんと為のみ。その心を視る事は掌に観るが如[illegible]知る事。君に在り。汝左ほどの智量なくば。争君の命じ給はんや。吾を始め老臣ざり。其御諚に従はず。汝をまたでの才あらまへこそ。斯列席にて命ぜらる。夫を辞むる

但若年なる君況傷ず奉るべき心なかりしと結るべし。義秀再び羽を延して。辞むべきを
あくまで命畏こみひぬ。紙令水火の中わ入るとも。肖き奉かべきなりねど。唯その任ふ
ざるべし。一旦辞退言せまくは。衆人の笑ひ。彼地へ帰り。辞を計ひ言えて其席を退出る。
程なのせび安達景盛召ふ因て参上に。羽林家則三河国の賊を強くしと命せらる
まび景盛八一議ふ及べ。領掌をて退くべ。北條以下の老臣。もの席を退きる。爰
ふ。て頼家。辞命中野の胸中より出て。妨らるべきものと。慎ふ退る便ふ。ありしと。ふ欲
び能成て屢称しゆいる。奥ふ安達景盛。三河の群盗を強ひべき君命の下りい勇
士の多ふとり。規模のまと在番として京師ふ在るこ三年すたこの者帰とり。ふ。ぐ半年
もあるべ。ふの命の下ると。必ず人のあるべ。彼国ふ己が領とる壮図いありとい。
まこ守護人あり。地頭職あり。さまざまあるべ。野伏の一揆を張むふ難きこあるこ。執権の
計らひ。兎ふも角ふも恐るべ。世の中こを安らべ。と思ふ。て。板垣兼信。名張ときこ

情まて。頓ふ出さ。芙蓉の芙蓉もあけまこ遅こ。ゆび臆せ。まど毒蛇の舌ふ係る。芽悟
いざこて人数の手配を定め。准備ふ入かこ。整ひぬ。あ。ふ。並ふ景盛ふ対ひ。かくも上言
さ。首途ふ忌ひ。さこて。城ふ障ふ。いく。所ふ。もあ。ん。ふ。て戦場ふ除むりの。影を
忘こ妻ふ。こ忘こ。命ふ羽毛の軽きふ比。義を金鉄ふ重こして。活んこを願いを
とれ。這回封手こ出こ。あ。いと勇まこ。武士の。ふ。ふ。こ。い。栄こ。そ。ま。こ。勝負的
の運こ。ふ。ふ。賊。こ。伐平らげ。ぬ。こ。飯陣。ふ。や。否。ふ。こ。ま。こ。ん。こ。考
の旅路。こ。別ふ。袖こ。絞る。ふ。こ。て。世間の情。ふ。軍ふ。出る。君こ。て。ふ。ど。此処
ふ。や。後。べ。死。ふ。こ。も。こ。る。こ。も。君ふ。任せ。こ。ふ。こ。ま。び。彼処へ。体。ひ。ぬ。ま。こ。
こ。赤心。こ。え。て。唱。つ。ぬ。ぞ。弥武心の景盛。何こ。ふ。べ。ふ。ふ。雲。ふ。眼。を。塞。ぐ。そ。あ。り
ける。忽地。叫。こ。ち。ち。矢。ひ。心。弱。こ。ら。ふ。の。こ。る。命。こ。捨。て。敵ふ。む。こ。ふ。ふ。て。軍陣。ふ。こ。
ひ。と。い。こ。開。い。敵ふ。ま。こ。る。ふ。の。こ。ふ。這回。の。こ。ふ。野伏。ま。こ。ふ。黨。こ。結。び。て。机妨。る。ふ。の。こ。且。て

他の族ふかのうんさるの深くるるひ若しして遅くて三月速くば二月ばかりの内に
市中に成長武辺のことを知らぬみよう然るに減増きて迷らいめり元来軍陣に出る者
女と伴なひ制禁あり殊にその隊の大将と争その禁めに犯さるるさ吾とその此月
日睦こ語らふ情のみ忘れ難きわびに別るるこの心憂けきど君の命とれ
何ぶせん後とるのまに長くとも安きに月日あり要用のみとを忍ひてあれと説
示ときそ笹船軍の掟厳きくて伴なひ下るる給方有。然に主人の勝ふきけば治兼
のひ一木曽殿に鞆繪に為と陣中へ伴ひ大勢の忍ふるに愚の
みなりて支給のことを論らふへきことるるねば。孫の頼ひ伯父不測の縁に撃るまて。
産の牝さへ京師へ送り遥下る五妻洛やあの鎌倉へ参りも君に情に絆さまて
且暮冊をさ手ふる情さめるを便るるに今まこと別まるせそのせ死ぬるる
まち美弓手狭こ怖ずき敢に對ひ難ひ。倘日あんみに過のあるこ咲へ恥ふせん。

と猶平伏て法師さまろ得勇士と為ふ景盛ふまと思老の情に弱ふ村と
張で心弱くて怯へと眼ふの涙をろ拂ひ或ひは威一或ひは嚇一ばそあること
ふるる紙に吉辰を擇ひ勢拭ひて頓て強金をうちまろ。妾平某生再説朝夷に
夫ろ為ふ宿呼へ飯で父義盛及び兄常盛まふ今日ば此の命あり。身ふは應其
こるまに一回辞退ひとせ一ると執権曽て許さば畏まて退出ろ周人早く彼地に下て
出ぬと存ぬるる。旅の調度ふ合期せば那に家に在合の東西をそまく会ふ
とうへば義盛点ぬて頼て莞ふとうち笑ひ這は你等の若輩めて命ず人きこるるれと
執権容ふ君と勧め表ふの你をて重く用ふる容ふ是その内心は十にして七八は社稷
すへ。愛下をまと越度ふ人。吾こ威光削らんとする。奸縁ろ出ろこるる。然まと
今更辞むふ術ふ。心を責て務むへ。と結ふ武秀額着に命畏こひね。侍徒
ふ人三草太郎五ろ義法ふ通ーろ。城戸四郎は給と若ふろ両個と伴ふひふ。

猝十二八刀に仕課せん心を棄しかバ更に変らず氣久もなく旅の准備を急ぐや武氐昌之の両個を招き猝ねに嗚呼ならバ汝達両個をもて往ゆく。五子武略を心に掛れどいまだ兵法の道に疎し。這回の事ハ田畠田溝漁ねて美と図とをもて第一の要とすべし。遂に両個ハ其道に参因する者なれバ已が羽翼とするぞと。之ハ具に命を頒掌せり。斯て日ならん旅の准備残る方なく整ひけれバ営中へ出て仮暇をまうし請。執権と姉め夫へも其よし演説ぬ。父と同胞にも別れを告て其地を発足ぬ。斯有けれバ中野以下阿倍遁逓の戯ぞどもそや姉の弟一なる景盛ハ出陣させる護身に朝夷も既に陸奥へと往されバ今ハ猶予をすべきにあらバ然とも景盛が館に留守の為ありて輙くハ無輸ぬ侍へ逃ぐるも怯へ老加綱に西渋谷の方より消息せしのに其後敢て音信せざれバ這回の一挙無輸ハ未ども然ようなく限する忍ひる撰ひて走らんと無ぐ強盗の所為なりとぞしゃよろこ過のあらん日知りぬ。然ハ彼等が其由を窓に告て后に討らバ何の係細かあるべきなりとて

足ハ晴氏に討んずるこそ善まて此すて許さるに晴氏熟思惟しぬ。いかにも一個内通し討るハ易きことなれど。始め君の此消息に吾書翰を副え贈りて死封を披くまじきと思ふにより。渠が親眷所堀河よりもあらん異義なく披きて計策の其図にあらずして披きてまたバ隣なりとも捨がたくして一塁の答一言も為るべくも渠が底意は何とらんも知るべからず人をさし忍び入り営中へ伴なひて明に逃れおひ備す万一猝のこともならバ是も自まて天へありて景盛留守の備えあらばこそ由縁ずる事やあらん夜に紛まて忍び入て文庫に奪ひとらん如ぞと衆評区々にて決せ然。はみも淺月の証となる書翰を掠るべし。ま不意に奪ふ倍まるとも更うして中野以下五人のものハ交替甘縄へ至り安達が館を辞の戻やる寂しとも更にそれ便宜をうかゞふ時しも如月の中旬も桃の花も且く所あくときハ真にも空もくらく寒からぬ山の端に出る夕月夜朧に霞むその在さまもいとど栄ある心地して無輸ハ

近くこち出て眺やりけるが扨て其処なる庭下に跪て彼方此方と躊躇躇と世鶴が侍女と号し女二個あり侍と云こなるべし

この時分に二個の腐副さまで世鶴が今こそあれ元白拍子の流とぞ。却て人の居らぬこそまた甘き心地の月のまゆ〳〵葉山の彼方の隈までうせて歩行ふ

雅こそ〳〵捷速の数隠さく撥ひけて頭は生る大漢士花かつて世鶴が物を抱むとする猫ふ走つて合せ猿轡其手を返して小脇に抱えまさかの其数と撥分てかさくと走りの世鶴がこの作天に敢て兎角のみも覚えぬ生る心地も自死生とふ恐ま武ひて身は戦慄を叫ぶんとまで声はさぬ。是ぞ地獄の罪人ばかの獄卒が中にまでらる天の車がうち載せまでる心地もかやと思はまさりかこて大漢士花のかと五七町走り来まで縁く相図や定めけん侍ふ婦ふ女家相で早持世武士雑人うち交て二十人計り出来り夫とうろ家相で侍ふ下さ渋谷氏神

ふ〳〵と言早こそ。かの癖者は頭を帽子衣を把やう世鶴が其処へ下し手早く舎せ猿轡と撥とやう言はず。吾は渋谷晴氏の先須君の消息を賜はりに和に再ふ吾等が方へ一枚の返し状を世鶴は覚えぬん我ふ君はまさかの家の是に家分ば浮ぶのへと見る吾こそは痛いくやへのうち景盛とふ生ある花と手折ふ〳〵其使宜と後うちふ這田景盛張盗と追討ってもやく君の兵路の怪ふ祥。吾こその須力と猶〳〵今宵図らば折と切て安二妻三ふ住ひう定めて和に再は残さこそ。然ども世のこと尚ふ〳〵ある仏ふ義すの為と思ひる。汗はまく〳〵君とふ赤心れ。ふ子ふと推量を怪思せ上然ふ見ふ上日ふ花営中へ伴ひて君の見参ふへこそ。ふ如此心浮とふ素物へ状素ふ〳〵と猶釋と張めて世鶴が月の明ふ瞳と定めれば見ふんに兎ふ渋谷小五郎ありけるぞいさこそ胸の落ふ涙ふ〳〵より出ふ営中へ〳〵と渡ふ新と左右ふ〳〵ふ動こそ月の光ふ兎ふ彩ふ出べ銀齋せ素ふ〳〵金

銀の蒔繪あり。金物厳しく打たるは月に映じて怕明なり。○これも是は営中の人の調度に疑ひなし。然ればこそ渋谷が如く殺されし身を事ともせず若君を迎へあげ我等あをね行状しも白石丸とあるは忘れずに手にとりて参らせ勿体なくも嬉しけれど安達の刀称に限りたるは豁恩を稟りたるにや辞せし所なれども今営中へ参るならば人々ものゝ道あらんや何はせんと心一つに定めかねて傍なる人々に在りける小五郎侍へ跪きより和れ再安達一箇の情を立て心理決しかねたると見受たり。君まで大功は細瑾を顧ざるの本文あるに些を捨て大を取る実に一世の冥加なり。惑ひを去れば僥倖も此に変じて禍ひとなり。絳によりては景盛が身にも係る大事に及びなんと。よく思ひ返して見よ。かの系師の白拍子君順ひ妹ならずや。否けれは向の岸に在てかの岸に舟一葉も進めずに近曾安達が館に在る時も本妻なれども不與を被るとは世にその家を遂ぐべし。然らば女子の心狭く妬忌に心移りは却てその身の害なるべし。左来と宗縁と宗袍の戸をひき

間に推入りて世務心は決せざりしが。さればこそ彼等にも詮方なければ弁が侍婢や侍る処を矢庭に其処へ抱き入れ。宙を飛んで馳せ安達が館にかの侍女が周章ふためきて雑鶴が在家を探せど知らねば。余りに呆れ惑ひつゝ其由鈍く守りて甲乙へ訟へて猶遠近を尋ねるに。かくてその夕の逸早くも羽林の所に達しゝ程なく渋谷山野等がその女子を将て来るにぞ注進によりて頼家は悦びあへる事大方ならず。やがて左右の内美麗なる一間を暴に修補させ。金襴纐纈の衣裳はさらなり。朝夕の調度に至るまで。よろづ金銀を鏤りたる結構善美を尽しぬ。実に下ざまにて育ちし身にはまことに有りがたね品どもを何くれとなく取揃へまゐらせ冊きぬ女子とて心利たる婢女を両三個こそ付たれ。今や遅しと待儲けるは時めく人の花瓶を迎ふるにも異ならざりし。以てこそありけれ頼家も豫て女が素性を聞くにあなる何事もさやかにいはね。ともすれば安倍に将て来るとも心は寂然に渋らん。昔念を断んぬは富貴をもつて誘ふより他に術計はあらざるべしと思すなかなか

いと疾やうふかくなを。新て晴氏能成給へかの乗物と急りて奥に殿へ舁入
さて此処の動静と窺ふかの此こ有こと聞けるこそ則老女へ対面の乗物のまく長を遍
ふて。雑人共と労ひ給ふ。己が法所へ帰りる老女の乗物の戸と引開つ笹蟹が途方ふ
暮くる景勢なる。労ひ仕けて湯をとゝえ辞いた方法有ようなれ。ハて兼知
らん此処とそ羽林家の此所とう。成ふおん身を任さ局の局より命ふ。ようく補
理て召仕ふ女ふざり是ふあり。怒やあと彼老ざりて浮と対面さそるあと彼女ふざり
心とゆと一個とふ答渇とふ則局へ伴ふ。その法らる言語ふ絶て物ふ知さ者ふ
ぞろ。扨て女ふざりふ笹蟹て湯殿へ伴ふひ湯と浴させ。後て他の晴氏給へとふ後
ろ立かを。新ひそいざ此方へと局の局へ誘ひて。紙子の褥ふ居らしめて高坏ふ
盛て出し菓ふさ人同ふ立ふ物ぞろ。笹蟹ふ爰のうちに猶爰足る心地ふ。ふ
善悪とさ人辨へ。雲時ふ立て局の老女ふ。今宵ふ作ふて未ふひる。慰ふふこて

白拍子と数多召寄て。酒宴あり。休息あるべ其席へ。安内して参るべ。居にも
局ろ後せふ。とふ不用て笹蟹ふ覚束ふ身を起せば老女ふ。ふ
いふ逃げ。廻廊と。彼方此方と仕ぞふ。扨て廣らふ所へ。ふ実ふ金烏銀
鵲ふ。夢ろ明く立連れ白拍子ふ教ふ集舞とふ。その正面ふ
君とあり。曲緑ふ侍副ふ。教ふの美女ふ酌とふ。ふ舞を視て奥ふ。ふ老
女ふ笹蟹て。前近く進ふ。今宵ふ召ふ。ふ笹蟹ふ侍ふ。ふ曾根と
まで頼家ふ是とふ。ふ祝ふ現ふ晴氏ふ言葉ふ差ふ。天然ふ容色ふ天津乙女
ふ影向ふ。ふ勝ふ。ふ秦の阿房ふ。ふ三千の美女とそふ。
吾傍ふ。ふ仕ふ女ふ逸ふ容貌ふ勝ふ。ふ笹蟹ふ疑ふ。ふ
敵ふ。ふ心中十二分ふ歓ふ。ふ笹蟹ふ下ふ。ふ笹蟹ふ縁ふ。ふ
さふの命ふ。ふ義とふ。ふ是非ふ。ふ思ふ。ふ束ふ。ふ

まで愛又のゐ実ふ勿体なれ所為なるとそのゐ心ふ悖まら。不まべ益く罪深うり。偽谷ぬーゞ言葉のてく安達の刀称の正室ゐゞ。殊ふ彼人まゝ主君と仰ぐゐ所ゐの斯まで厚きゐ心を如何ハせんと忽地心と翻ーて。ゐ盃を賜りて入ゐり主人ゐ杯ゐ作りて。種くの奥を副るゐどふ羽林ひこまと三ゐ老ふ思ーゐさまて庭ゐゐ者の伝と雑ーゐ玉ハ寵愛日ふ深増り。かの唐朝のそのむう。楊家の女児宮ふ入まとう六宮の粉黛顔色ゐと。白楽天ゐ賦ーうも。今更思ひ遣まとう

朝夷巡島記全傳第七編巻之一畢